

令和4年度 第3回熊本市小中一貫教育懇談会議事録

日時：令和5年(2023年)1月30日(月)
14:00~15:30

場所：教育センター(3階 第1研修室)

○議事録

- 1 開会
- 2 教育委員会事務局挨拶
- 3 議事 協議 次年度に向けて
 - (1) 事務局説明 取組紹介及び小中一貫教育及び小中連携教育に関する調査について
 - (2) 意見交換 今年度の振り返り(課題点)と来年度の構想

古賀座長	第3回の懇談会目的は、今年度の振り返り。課題がどこまで達成されて、何が課題として残っているのか、次年度に向けて意見をいただきたい。
小田委員	令和元年度から取り組んでいるので少しずつ充実してきているところである。特に、職員の意識が高まってきたと感じている。この前のKEWに本校は参加したが、小中一貫教育について、子どもたちと一緒に考える良さを感じた。本校では、各クラスで視聴していたので、生徒たちから「こんなことをしたい」と自主的に意見が出てくればよいと思う。これまでは、先生たちだけで一生懸命考えていたので、生徒たちの意見も大切にしていきたい。また、今年度、新たに総合で地域学習に取り組んでいるが、今後、地域の学校サポーターのような方々に学校をサポートしていただけるような体制を整え、地域とともに進めていきたいと考えている。
千田委員	10月からの取組を紹介する。文化発表会で小学6年生を招待して、中学校の学びを発表し、一緒に学び合いを行った。12月、家庭科の乗り入れ授業を行った。河内小中学校は隣同士の学校である。座学の時は小学校で、実習の時は中学校で行った。学校が隣同士のため、設備が充実している方で実施し、それぞれの良さを生かすことができた。スクールコンサートでは、玉名女子高校の演奏を小中学生で聞くことができた。1月の保小中連携の日に、情報共有、年間反省を行い、次年度へつなげた。小中一貫カリキュラムを実践していく中で、小学校と中学校で同じような内容をしている部分があったので、次年度に向け、整理していく必要がある。また、教頭や一貫教育の担当がコーディネーターとして動き、つなげていくことも必要である。さらに、目指す子供像を共有し、できることに少しずつ取り組んでいきたい。
古賀委員	今年度の課題について、校長と確認した。昨年度は自主発表をするという目的があり充実していたが、今年度は担当間や部会の情報共有をする機会が少なくなり、小中で確認して、共通して取り組む部分が令和3年度に比べたら減少した。6月、名城大学の曾山先生に、小中合同で取り組むグループアプローチの託東タイム、二岡タイムについて、指導助言をしていただいた。それ以外の小中合同の研修会ができず、顔を合わせる機会がなかった。 無言掃除の取組を小中で進めているが、6年生に向けて動画で中学生の様子を撮影したものを共有し、目指す姿を確認して中学校に進学することができている。校長先生同士の情報共有も必要だと感じ、今年度から進めている。小中連携の部会を定期的にしていく必要があると感じている。教頭、教務主任、人権主任等の担当同士の会をもちたい。 グループアプローチについては、春休みの間に小中合同の研修会を開き、進めていく予定である。

<p>榎木委員</p>	<p>前回協議題となった、教育課程の特例を活かした取組についても、来年度に向けて進めているところであり、中学校とも連携を図っていきたい。</p> <p>今回の取組紹介にあったような児童生徒の交流が、本中学校区では進んでいないと感じているので、どのように進めていくかを考えていく必要がある。学校に持ち帰り、共有したい。</p> <p>今年度から小中一貫校になったので、校長会を中心に何から進めていくのかを話し合った。小中一貫カリキュラムの作成を行った。そのために、天明地域のよさ、特に地域資源を生かす取組をしていきたいという思いを中心に、カリキュラムを考えていった。その中で同じ目標に向かって進むということで、5校の教育目標を1つにするということを決めた。目指す姿を共有して、月1回、小中合同研修会をオンラインで開くこととした。12月の第1回では、指導課から「本市の今後の方向性」、私から「会議の意義」を伝えていった。この会議は、毎月開催していく。その中で、どのような「目指す子どもの姿」にするのか、それを受けたアンケート項目を作成していくように計画している。5校みんなで共通した目標をもって、取り組むこととした。教職員の意識を新しい学校を開校する準備として、意識を高めているところである。小中一貫教育を取り組み始めた実感としての良さをどのように伝えていくかが大事である。</p> <p>そこで、その校区で、目指す姿に向けた項目を学校評価に入れて、成果と課題を整理して、目に見える形で実感を伴って進めていきたい。</p>
<p>西川委員</p>	<p>令和3年度は、カリキュラムの計画及び創造の年度だった。令和4年度は実践の年度である。実践し、見直していき、小中一貫カリキュラムをアップデートしていく。人権学習として、十分なものかどうか、時期や教材内容等についても見直しをしているところである。</p> <p>もう1つは、教職員の意識をアップデートすることである。小中一貫校として教育目標を共有したことで何が変わるか、9年間で何を目指していくのかを再度考えようということ、学期ごとに振り返りをしているところである。</p> <p>1月の幼保小中連携の日に、春竹小学校で、令和4年度江原中校区幼・保小中連携「人権教育授業研究会」を行った。大事なことは歩みを止めないことである。子どもを中心とした人権学習カリキュラムの一環で授業研を行っていることを再度確認した。その際、幼保連携の意識も大切にし、幼稚園・保育園にも参加していただくよう声かけをした。子どもたちの様子を見ていただき、一緒に考えていくことができた。</p> <p>本日紹介されたアンケートの中で、児童生徒の質問7「上級生を見て」確かに3%、9%であるが、実際の人数として、11人、12人などそれぞれの事実がある。だれ一人残さない教育という視点から見ると黄色「そう思わない」と感じている子どもたちの思いを大切にしなければならない。</p>
<p>出田委員</p>	<p>先週のKEWのオンライン会議に参加した。子どもたちや先生方と意見交換ができた。子どもたちのしたいことと大人の考えていることと全然違って、子どもたちの思いを大切にしたい会議を進めていきたい。</p>
<p>梅田委員</p>	<p>本校はCグループである。本会を通して、校区でどのような子どもを育てたいのか、学校教育目標（上位目標）をお互いに理解、共有することが大切だということ学んだ。本校からは2つの中学校に進学する。本校を中心に考えると2つの中学校と小学校6校が関わっている。中学校区ごとに校長会を毎月1回（2つの中学校区それぞれに開催）行うとともに、教頭会や情報教育担当、研究主任、徒指導主任など、担当同士で知り合う機会を設定した。上位目標を</p>

<p>松島委員</p>	<p>共有というところまでは進んでいないのが実情。1つの中学校はチーム担任制に取り組み、各生徒が相談しやすい先生に相談する体制づくりを行っている。そこで、本校でも学年部を中心に、一部教科担任制に取り組んでいる。学年部で子どもを育てるという姿勢を大切にしていきたい。</p> <p>AグループやBグループの取組を聞き、小中一緒に交流している姿を見るといいなと感じ、取り入れていきたいと思った。調査結果から、保護者の期待する内容としては、学力の向上が1番上であるので、小中連携することで学力向上の一助ともなるといった取組の様子を保護者に伝えていけたらと思う。</p> <p>教職員の意識が課題として挙がってきているが、小中の職員の意識が溶け込むことが大事である。例えばある学校で、体育館の「上靴文化」の共有に苦慮した学校がある。なかなか話し合っても溝が埋まらなかったが、その後職員室が一体化し、自然とコミュニケーションが生まれたことにより、数日で共通理解を図ることができた。今後、小中一貫教育を進める中で、中学校の目指すところに小学校が合わせることもあるだろうし、小学校に中学校が合わせることもあるだろうが、地域の実態に応じて最上位目標を決めていく必要がある。この内容については、先生も子どもも同様である。</p> <p>また、小中一貫校では、特例措置が認められているので、その柔軟性を生かし、特色を出してほしい。学校規模に応じて、取組内容は変わってくるだろうから、その状況に応じた取組を推進してほしい。</p>
<p>古賀座長</p>	<p>先ほどの「上靴文化」ではないが、私が関わっている義務教育学校開校に向けた準備委員会では、制服をどうするか議論があっている。その中で「小学校文化」でもなく「中学校文化」でもない、新たな「義務教育学校文化」をつくり出すという機運が生まれつつある。教職員の意識改革が重要であることはご指摘の通りである。</p> <p>今回の意見交換の中で新たな視点として、「子どもに注目してみよう」ということが挙げられた。これまでは大人が中心に考えていたが、これからは子どもにとってどうか、どうあるべきかを考えていく必要がある。特に、子どもにとっての意義や効果、「小中の壁が低くなる」、「あこがれになる」、「上級生になるのが楽しみ」、というような生の声を聞くことは大切である。熊本市では、以前から「子どもフォーラム」があったので、そのようなものを活用してはどうか。カリキュラムについても子どもの体験活動を取り入れるとよいのではないかと考える。</p> <p>また、平成16年に最初のコミュニティスクールが設置された、足立区立五反野小学校の取組は、子どもの実態調査「五反野未来ブック」から開始された（金子郁容編著『学校評価』、ちくま新書）。ここから、「目指す学校像」、「望む校長像」、「望む教師像」、さらには「望まれる家庭像」、「望まれる児童像」を地域と一緒に作っていった。残念ながら、五反野小学校は統廃合になったが、「社会に開かれた教育課程」を大切にする取組は参考にしたい。また、「チーム学校答申（平成27年）」に基づいた取組を進めて、学校外の専門職を入れ、厳しい条件にある子どもたちにとっても、より良い教育となるようシステムの転換が求められる。</p> <p>今回は、「子どもたちを中心に置いて、<u>小中一貫教育の意義</u>を考えていく」という視点を大切にしながら、次年度の事業を進めていくことを確認して、会を閉じる。</p>

4 事務連絡・閉会